

郷土資料館の

お宝探訪

Treasure
12
近代絵画の旗手
「浅原清隆」
あさはらきよたか



▲女子アパート

▲淡路島

郷土資料館の大事な仕事のひとつに、播磨町の歴史を彩る様々な資料の収集や保管があります。本年度は、数ある資料館の収蔵品のうち、代表的なものを紹介していきます。広報はりまの掲載月にあわせ、関係資料を展示します。ぜひ本物を見に来てください。

播磨町郷土資料館 ☎079(435)5000

播磨町出身の画家、浅原清隆はわずか30歳で亡くなったため、作品の数も少なく、その存在はあまり知られていませんが、新しい絵画運動に積極的に参加するなど、将来を期待された画家でした。

清隆は大正4年、加古郡阿閉村大中（現在の播磨町南大中）で9人兄弟の長男として生まれました。浅原家は祖父の代より醤油醸造業を営む素封家で、小学校では常に一番であったといわれています。

その後、兵庫県立加古川中学校（現在の兵庫県立加古川東高校）に入学し、美術クラブで活動、その傍ら神戸に通って小磯良平に師事したりもしています。

中学校卒業後、親の反対を押し切って上京。帝国美術学校（現在の武蔵野美術大学）西洋画科に入学し、映画研究会に入ります。在学中に起こった美術学校の分裂騒

動をきっかけに、30余名の学生が学長の辞職を求めてストライキに入った「同盟休校事件」にもかかわったようで、当時の雑誌やメディアでもスキャンダラスに報道され、注目を集めました。

在学中の昭和10年、第22回二科展に「敗北」が入選します。また、同級生とともに新しい絵画運動をめざしてグループ「表現」を結成し、銀座紀伊国屋画廊で「表現」第1回展示会を開催しています。

さらに、ストライキ騒動で壊滅状態となった映画研究会の再建や前衛映画の研究にかかわるなど、多彩な活動を行っています。

昭和14年には帝国美術学校を卒業し、7月にそれまでの10年間の作品16点によって人生ただ一度の個展「浅原清隆個人展」を故郷に近い神戸で開催しています。

この年の年末には第1回目の応

召があり、中国河北省に派遣されますが、昭和16年に中国戦線で負傷し、日本に送還され療養生活を送ります。除隊後、かつて台湾旅行で知り合った青木美枝子と結婚夫婦で郷里、播磨町大中の実家を訪ねるとともに、大阪、京都、奈良、倉敷などを旅行し、短い夫婦生活を送っています。

しかし、昭和18年に再び応召し、南方戦線に派遣され、昭和20年5月ビルマ（ミャンマー）で行方不明となり、わずか30歳の若さで帰らぬ人となりました。

当館は清隆の妻であった美枝子さんから寄贈を受けた絵3点（淡路島、「女子アパート」、「木のあゝる風景」）を所蔵しています。いずれも16.2×23.0センチの小品で、「淡路島」のみが、昭和14年の制作であることがわかっています。

播磨町郷土資料館 館長 井守徳男

町の人口 2月1日現在 (住民基本台帳人口+外国籍人口)

34,831人(-8人) 男...17,082人(-9人) 世帯数...14,181世帯(-10世帯)
女...17,749人(+1人)